

☆四旬節第5主日(3月17日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (エレミヤの預言 31章 31-34節)

見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。そのとき、人々は隣人どうし、兄弟どうし、「主を知れ」と言って教えることはない。彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知るからである、と主は言われる。わたしは彼らの悪を赦(ゆる)し、再び彼らの罪に心を留めることはない。

第二朗読 (ヘブライ人への手紙 5章 7-9節)

キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。

キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。そして、完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となりました。

福音朗読 (ヨハネによる福音書 12章 20-33節)

さて、祭りのとき礼拝するためにエルサレムに上って来た人々の中に、何人かのギリシア人がいた。彼らは、ガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとへ来て、「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。フィリポは行ってアンデレに話し、アンデレとフィリポは行って、イエスに

話した。イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる。」

今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。父よ、御名の栄光を現してください。」すると、天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」

そばにいた群衆は、これを聞いて、「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った。イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

春の暖かさがやってきましたが、予報によるとこれから先一気に寒くなるそうですので体調管理に努めましょう。「はしか」も流行りだしそうですので、気を付けてお過ごしください。

さて、教会の典礼ではこれからは主イエスの受難と復活に向けての日々となります。私たちと主イエスの関係が今どうなっているのかを黙想するに適した二週間です。また19日(水)は「聖ヨセフ」の祭日です。イエスの受難時の福音には聖ヨセフの名前は出てきませんが、それまでのイエスの生涯においてはとても大切な人なのです。週日ですができるだけミサに参加されることをお勧めいたします。

第一朗読（エレミヤの預言 31章 31-34節）

ここでは主なる神がイスラエルの民と新しい契約を結ぶといわれています。それはエジプトからイスラエルの民を導き出したときのものではないとも言われました。またそれは彼らの胸の中に授けるともいわれます。ですからそれは何かに書き付けられるものではなく、心に刻まれるものなのです。そしてこの預言は主イエスの最後の晩餐の時に示されることを現しているのです。主イエスはその肉と血をもってご自分に従う人々と新しく契約を結ばれたのです。ミサの聖変化の時の司祭の言葉に注意してみましょう。

第二朗読（ヘブライ人への手紙 5章 7-9節）

この手紙は作者不詳と言われていますが、初代教会の人々の信仰を力強く述べたものになっています。主イエスはその人性において激しく苦しめられたことを述べています。イエスのゲツセマネでの苦しい祈りの時を思い起こしてみましょう。血の汗を流されたと書いてあります。この受難の時を避けさせてほしいと祈りながら、み旨のままにと決意を新たにされるのです。この時のために主イエスは人となられたのです。ですから主イエスは私たち人間の弱さを十分にご存じなのです。ミサの中での信仰宣言を唱えるところがありますが、聖書の受難の部分をよく思い出して唱えてみましょう。

福音朗読（ヨハネによる福音書 12章 20-33節）

「一粒の麦」の話が出てきます。イエスは麦の粒が土の中に落ちて、その殻が破れることを「死ぬ」と言われますが、それは同時に新しい命が芽生える時でもあります。そしてその芽生えたものから根が生え、莖が伸び、穂が実って数百の粒が実るのです。麦粒の殻が破れることが大事なのです。私たちは自分の殻に閉じこもってはいけません。私たちは生きるには自分の殻を破って、自分の中に刻まれた契約、つまり神の望みを行うために生きる時、私たちは多くの実を結ぶのです。「死」とは新しく生きるために自分の殻を破ることなのです。腐った種は殻を破ることはできません。生きている種だからこそ自分の殻を破ることができるのです。



MENSA CHRISTI (キリストの食卓) ペトロの召命教会 (2018年8月)
※イエスが復活された後、弟子たちに現れ魚を食べた岩だといわれています。

PS

来週は受難の主日です。人間の心変わりの醜さがみられる朗読があります。マルコ福音が読まれます(マルコ11. 1-10, 15. 1-39)

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光